

渋沢栄一年譜

西暦(和暦)	年齢	主なできごと(日本と世界の動き)
1840年(天保11年)	0歳	2月13日、現在の埼玉県深谷市血洗島に生まれる。(アヘン戦争勃発)
1847年(弘化4年)	7歳	従兄尾高惇忠から漢籍を学ぶ。
1854年(安政11年)	14歳	家業の畑作、養蚕、藍問屋業に精励。
1858年(安政5年)	18歳	従妹ちよ(尾高惇忠の妹)と結婚。(日米修好通商条約、安政の大獄)
1863年(文久3年)	23歳	高崎城乗っ取り、横浜焼き討ちを企てるが、計画を中止し京都に出奔。(井伊大老暗殺(1860年))
1864年(元治1年)	24歳	一橋慶喜に仕える。(外国艦隊下関を砲撃)
1865年(慶応1年)	25歳	一橋家歩兵取立御用掛を命ぜられ領内を巡歴。
1866年(慶応2年)	26歳	徳川慶喜、征夷大将軍となり、栄一は幕臣となる。(長州征伐、薩長同盟)
1867年(慶応3年)	27歳	徳川昭武に従ってフランスへ出立(パリ万国博覧会)。(大政奉還、王政復古)
1868年(明治1年)	28歳	明治維新によりフランスより帰国、静岡で慶喜に面会。(戊辰戦争(1868~1869))
1869年(明治2年)	29歳	静岡藩に「商法会所」設立。明治政府に仕え、民部省租税正となる。民部省改正掛掛長を兼ねる。(東京遷都) 東京・横浜間に電信開通。
1870年(明治3年)	30歳	官営富岡製糸場設置主任となる。
1871年(明治4年)	31歳	紙幣頭となる。「立会略則」発刊。
1872年(明治5年)	32歳	大蔵少輔事務取扱。抄紙会社設立出願。新橋、横浜間鉄道開通。
1873年(明治6年)	33歳	大蔵省を辞める。第一国立銀行開業・総監役。抄紙会社創立(後に王子製紙会社・取締役会長)。地租改正条例公布。
1874年(明治7年)	34歳	東京府知事より共有金取締を囑託される。
1875年(明治8年)	35歳	第一国立銀行頭取。(商法講習所創立)

井上潤氏

井上潤氏
渋沢史料館館長

1958年大塚市生まれ。明治大学文学部卒業。渋沢史料館学芸員となる。神奈川大学日本市民文化研究所客員研究員や国立近代文学館共同研究員などを歴任。2001年に史料館学芸員に就任。2004年から館長。著書多数。

「道徳経済合一説は、現代の経済人にも通用する思想」と話す井上館長



民が率先する外交、福祉活動

井上 第二に、民間外交の先駆者でした。渋沢はつねづね「世の中は官主導でいくべ

きでなく、むしろ民間が官をリードしていくべきだ」と語り、自ら実践していました。象徴的なのが、1909(明治42)年わが国初の渡米実業団です。この年、古希を迎えていた渋沢は、約50人の経済人の団長としてアメリカに渡り、各地を訪問しています。相当ハードスケジュールだったといいますが、高齢にも関わらず精力的に

活動をしています。例えば東京養育院は、なんと60年

ますし、最近またブームになっているとも聞きました。

また、現在の「商工会議所」の組織の基礎を作ったのも、渋沢栄一であることは、広く知られています。彼は、日本経済が発展するためには、経済人が意見交換をする場が必要だと考えました。その一つの現れが、「東京商業会議所」(後の東京商工会議所)の設立でした。

さらに「道徳経済合一説」を唱えています。簡単に言うと、経済活動は、倫理をもつて行うことで、真の利益が得られるということ。彼はその規範を論語に求めており、そのエッセンスは「論語と算盤」という著作に盛り込まれています。この本は現在でも多くの人に読まれている。



【写真/上】1867年フランスにて、髷を落とし、シルクハット姿の渋沢栄一
【写真/下】エジソン電気会社での記念撮影

視察や親睦を行い、米国の富豪で石油王といわれた「ジョン・ロックフェラー」や、エジソン電気会社の「トーマス・エジソン」とも意見交換をしています。この時期日本とアメリカは、貿易摩擦や移民問題などでギクシャクした雰囲気がありました。渡米実業団は、その解消が大きなテーマだったのです。渋沢は「互いをよく知り、自由に意見を交換することが、本当の意味での日米親善につながる」と考えていました。

組織による企業の創設・育成に力を入れ、また、「道徳経済合一説」を説き続け、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。

財団法人 渋沢栄一記念財団
Shibusawa Eichi Memorial Foundation
http://www.shibusawa.or.jp/

井上 渋沢の足跡は大きすぎて、とてもひと口に言えるものではありません。第一に、偉大な経済人でした。幕末から明治維新の時期、日本の社会は大きな変動に直面していました。政治も経済も社会制度も、それまでのものが反故にされ、新たに構築しなければなりません。その時期に活躍し、現在の日本経済の基礎づくりの一端を担ったのが、渋沢だったのです。それは個々の企業の設立や支援だけではなく、例えば日本で初めて近代的なシステムの銀行(第一国立銀行)を設立運営したり、株式会社という形態を導入するなど、経済の「仕組み」づくりを積極的に行ったところに、大きな功績があると思います。

また、現在の「商工会議所」の組織の基礎を作ったのも、渋沢栄一であることは、広く知られています。彼は、日本経済が発展するためには、経済人が意見交換をする場が必要だと考えました。その一つの現れが、「東京商業会議所」(後の東京商工会議所)の設立でした。

さらに「道徳経済合一説」を唱えています。簡単に言うと、経済活動は、倫理をもつて行うことで、真の利益が得られるということ。彼はその規範を論語に求めており、そのエッセンスは「論語と算盤」という著作に盛り込まれています。この本は現在でも多くの人に読まれている。



渋沢栄一肖像 70歳

日本経済の基礎を作った偉人

「渋沢栄一という人は、日本の歴史の上でどのような役割を果たしたとお考えですか。」

井上 渋沢の足跡は大きすぎて、とてもひと口に言えるものではありません。

第一に、偉大な経済人でした。幕末から明治維新の時期、日本の社会は大きな変動に直面していました。政治も経済も社会制度も、それまでのものが反故にされ、新たに構築しなければなりません。

その時期に活躍し、現在の日本経済の基礎づくりの一端を担ったのが、渋沢だったのです。それは個々の企業の設立や支援だけではなく、例えば日本で初めて近代的なシステムの銀行(第一国立銀行)を設立運営したり、株式会社という形態を導入するなど、経済の「仕組み」づくりを積極的に行ったところに、大きな功績があると思います。

また、現在の「商工会議所」の組織の基礎を作ったのも、渋沢栄一であることは、広く知られています。彼は、日本経済が発展するためには、経済人が意見交換をする場が必要だと考えました。その一つの現れが、「東京商業会議所」(後の東京商工会議所)の設立でした。

さらに「道徳経済合一説」を唱えています。簡単に言うと、経済活動は、倫理をもつて行うことで、真の利益が得られるということ。彼はその規範を論語に求めており、そのエッセンスは「論語と算盤」という著作に盛り込まれています。この本は現在でも多くの人に読まれている。

組織による企業の創設・育成に力を入れ、また、「道徳経済合一説」を説き続け、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。

財団法人 渋沢栄一記念財団
Shibusawa Eichi Memorial Foundation
http://www.shibusawa.or.jp/

特集 明治の偉人・渋沢栄一

近代日本の実業家 渋沢栄一の魅力を探る

渋沢史料館・井上潤館長に聞く
〈時代のオーガナイザー〉の横顔



写真: 船室の渋沢栄一

渋沢栄一とは、どんな人?

渋沢栄一は1840(天保11)年2月13日、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。

家業の畑作、藍玉の製造・販売、養蚕を手伝う一方、幼い頃から父に学問の手解きを受け、従兄弟の尾高惇忠から本格的に「論語」などを学びます。

「尊王攘夷」思想の影響を受けた栄一や従兄たちは、高崎城乗っ取りの計画を立てましたが中止し、京都へ向かいます。

郷里を離れた栄一は一橋慶喜に仕えることになり、一橋家の家政の改善などに実力を発揮し、次第に認められていきます。

27歳の時、15代将軍となった徳川慶喜の実弟で後の水戸藩主・徳川昭武に随行しパリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の社会の内幕に広く通ずることができました。

明治維新となり欧州から帰国した栄一は、「商法会所」を静岡に設立。その後明治政府に招かれ民部省、大蔵省の一員として新しい国づくりに深く関わります。

1873(明治6)年に大蔵省を辞した後、栄一は「民間経済人」として活動しました。そのスタートは「第一国立銀行」の総監役(後の頭取)でした。

栄一は第一国立銀行を拠点に、株式会社

- 1876年 (明治9年) 36歳 東京会議所会頭。東京府養育院事務長(後に院長)。(私立三井銀行開業)
- 1877年 (明治10年) 37歳 扶善会創立(後に東京銀行集会所・会長)。王子西ヶ原に別荘を建てはじめる。(西南戦争)
- 1878年 (明治11年) 38歳 東京高法会議所創立・会頭(後に東京商業会議所・会頭)。
- 1879年 (明治12年) 39歳 グラント將軍(元第18代米国大統領)歓迎会(東京接待委員長)。
- 1880年 (明治13年) 40歳 博愛社創立・社員(後に日本赤十字社・常議員)。
- 1882年 (明治15年) 42歳 ちよ夫人死去。(日本銀行営業開始)
- 1883年 (明治16年) 43歳 大阪紡績会社工場落成・発起人(後に相談役)。伊藤兼子と再婚。(鹿鳴館開館式)
- 1884年 (明治17年) 44歳 日本鉄道社理事委員(後に取締役)。(華族令制定)
- 1885年 (明治18年) 45歳 日本郵船会社創立(後に取締役)。東京養育院院長。東京瓦斯会社創立(創立委員長、後に取締役会長)。(内閣制度制定)
- 1886年 (明治19年) 46歳 「電門社」創立。東京電灯会社設立(後に委員)。
- 1887年 (明治20年) 47歳 日本煉瓦製造会社創立・発起人(後に取締役会長)。帝国ホテル創立・発起人総代(後に取締役会長)。
- 1888年 (明治21年) 48歳 札幌麦酒会社創立・発起人総代(後に取締役会長)。東京女学館開校・会計監督(後に館長)。
- 1889年 (明治22年) 49歳 東京石川島造船所創立・委員(後に取締役会長)。(大日本帝国憲法公布)
- 1890年 (明治23年) 50歳 貴族院議員に任せられる。(第一回帝国議会)
- 1891年 (明治24年) 51歳 京交換所創立・委員長。
- 1892年 (明治25年) 52歳 東京野畜銀行創立・取締役(後に取締役会長)。(日清戦争勃発(1894年))
- 1895年 (明治28年) 55歳 北越鉄道会社創立・監査役(後に相談役)。(日清講和条約調印)
- 1896年 (明治29年) 56歳 日本精糖会社創立・取締役。第一国立銀行が営業満期により第一銀行となる。引続き頭取。日本勸業銀行設立委員。
- 1897年 (明治30年) 57歳 滋澤倉庫部開業(後に滋澤倉庫会社・発起人)。(金本位制施行)
- 1900年 (明治33年) 60歳 日本勸業銀行設立委員。男爵を授けられる。
- 1901年 (明治34年) 61歳 日本女子大学校開校・会計監督。(後に校長) 東京・飛鳥山邸を本邸とする。
- 1902年 (明治35年) 62歳 兼子夫人同伴で欧米視察。ルーズベルト大統領と会見。(日英同盟協定調印)
- 1904年 (明治37年) 64歳 風邪をこじらせ長期に静養。(日露戦争勃発)

洪沢が掲げたのが「論語」でした。洪沢史科館には洪沢が「道徳経済合一説」について話す、貴重な音声のレコードが展示されています。その中で洪沢は「仁義道徳と生産殖利とはまったく合体するものである」「しかるに世の中がだんだん進歩するにしたがって、社会の事物もますます発展する。ただし、それに伴って、肝要なる仁義道徳というものが、ともに進歩して行くかという、残念ながら「否」



見事な筆致の、洪沢栄一による色紙

と答えざるを得ぬ」などと話しています。当時(明治末〜大正)の状況を振り返りますと、私は、現代の日本とよく似ていたと思います。個人の権利利益を尊重し、「金儲けをして何が悪い」と自己利益ばかりを考える人が、数多く出てきていました。この点でも、洪沢の言葉は決して古びてはいないと思います。

「洪沢が、当時の他の経済人と違って財閥を作らなかつたことも、その思想に関係しているのでしょうか。」

井上 そういふ見方もできると思います。三菱を創った岩崎弥太郎と洪沢との考え方の違いは有名ですが、そこが違っていたかといえは、岩崎はややもすると利益を独占する方向へ活動が向かいがちでした。自

分が創った「三菱」という組織に利益になることが第一であったと思います。それに対して洪沢は、自分の活動が国のためになるか、というところに大きなポイントを置いた人でした。自分が富むためには、国や世界が富まなければならないというのが、彼の信念でした。岩崎も洪沢も「経済を発展させたい」という考えは同じです。ですから基本は決して異なっていない。ただアプローチが違っているわけです。洪沢は、日本という新しい国に、新しい経済基盤を確立しなければいけない、それによつて日本という国の土台をしっかりとせたいと考えていました。ですから最初に銀行を設立したのも、早期にインフラ事業に進出したのも、国の基盤を確立することが頭にあったのです。洪沢も、常に独占を嫌っていたわけではありませぬ。その分野の産業がある程度

成熟し、過度な競争が不要になると、今度は合併などで安定方向へ持っていくようなこともしています。その際には岩崎とも手を結んでいます。その時その時の状況に応じて、活動の手法は変化させています。ただ根本にあるのは「社会」であり「国」であり、「道徳経済合一」の思想なのです。



日米報にも寄与した「青い目の人形」も、彼の尽力によるもの



実業家洪沢の活動拠点となつた、第一国立銀行

もの間、初代院長を務めました。洪沢が亡くなった後のある晩、庭の隅でじつと座つて祈っている男がいたと言います。関係者が声をかけると「私は養育院の出身で、院長には大変なご恩を感じており、亡くなったと知つてかけつけた。だが私のような無名の者が邪魔をしてはいけないと思ひ、庭の隅で祈らせていただいている」と答えたということ。養育院だけでなく、さまざまな福祉事業を行つていますが、同時に教育にも熱心で、商法講習所(後の一橋大学)や女子教育奨励会(後の東京女学館)など、数多くの教育機関の設立・運営に力を貸しています。

「生い立ちに後の足跡の萌芽が」

「本当に多岐にわたる足跡ですね。富農の出身である洪沢が、経済界で大きな功績を残すことができた理由は、何でしょうか。」

井上 江戸時代の農家はお米で税を納めるのが普通でしたが、洪沢の実家のある地域は米の収穫が少ないこともあり、早くから米ではなくお金で納めていました。また、商業活動も積極的に行われていたようです。そんな地域に生まれた洪沢は、幼い頃から経済というものに親しんでいたと考えられます。家業の手伝いなどをするうちに、経済センスが培われていったのでしょうか。

「生い立ちの中に、すでに土台ができていた」ということですね。

井上 そう思います。また、洪沢は生涯を通じて、官尊民卑の打破を唱え続けましたが、その萌芽もおそらくはその時代の経験からだと思われ。父や、地域の農民、商人や職人などが、額に汗して働いた結果を、役人が当然の顔で採取する。その不条理さに対する怒りが、後の洪沢を動かす力になつたのではないのでしょうか。

「洪沢は後に、社会福祉事業にも力を注ぎましたが、これについてはいかがでしょうか。」

井上 洪沢は「自分だけ儲ければいい」という考え方を嫌いました。逆に「周りが良くなることで、自分も良い生活を送ることができると考えていました。これもまた、父が村の世話役として、農民たちを助ける姿を見ていたから生まれた考え方だと思ひます。洪沢はその後幕臣となつて、十五代將軍慶喜の弟である昭武に従いフランスへ行きます。そこで西洋の現状をその目でつぶさに観察し、これがその後の彼の思想や活動に大きな影響を与えました。けれども、その根本には、幼少く青年期の、故郷での体験があるのだと思ひます。

「道徳経済合一」を説く

「洪沢は決して「金儲け」に汲々としている人ではなく、逆に経済活動には倫理がなくてはならないという思想を持っていました。そのことについて教えてください。」

井上 先ほど少し触れた「道徳経済合一説」は、ごくかいつまんで言いますと、企業を発展させ国を豊かにするためには、道徳と経済の合一が不可欠であるということです。そしてその道徳の拠り所として

東京商業会議所。現在の商工会議所はここからスタートした



洪沢が自らの倫理規範とした「論語」

渋沢史資料館のご案内



[写真/左] 渋沢史料館の外観 [写真/右上] 青淵文庫の外観 [写真/右下] 晩香廬の外観

渋沢史料館は、近代日本経済社会の基礎を築いた渋沢栄一〔1840(天保11)～1931(昭和6)年、号は青淵〕の思想と行動を顕彰する財団法人である「渋沢青淵記念財団竜門社(現・財団法人渋沢栄一記念財団)」の付属施設として、1982(昭和57)年、渋沢栄一の旧邸「嘸依村荘」跡(現在東京都北区飛鳥山公園の一部)に設立された登録博物館です。

当初の渋沢史料館は、旧邸内に残る大正期の2つの建物「晩香廬」と「青淵文庫」(いずれも国指定重要文化財)を施設として開館しました。その後1998(平成10)年3月に本館を増設し、現在は3つの建物で運営しています。諸資料の展示は本館で行っています。

本館

本館1階の正面入口を入るとすぐに直径8メートルの円形ホールになっています。2階の展示室へ通じる正面の階段踊り場には栄一の胸像が置かれています。

ホール右手に受付、その隣のミュージアム・ショップでは栄一に関する書籍や当財団の機関誌、絵はがきや一筆箋などを販売しています。その奥の閲覧コーナーには、栄一に関する書籍をはじめ近代日本の歴史や経済に関する書籍が置いてあり、入館された方はご自由に閲覧い

が置いてあります。長い弧を描く大きな窓から、飛鳥山公園の木々や青淵文庫が見渡せます。

青淵文庫

青淵文庫は、渋沢栄一の80歳のお祝いと、男爵から子爵に昇格した祝いを兼ねて竜門社(当財団の前身)が寄贈した鉄筋コンクリートの建物です。1925(大正14)年の竣工で、栄一の書庫として、また接客の場としても使用されました。

渋沢家の家紋「丸に違い柏」に因んで柏の葉をデザインしたステンドグラスやタイルが非常に美しい洋館です。

当初収蔵されていた「論語」をはじめ多くの漢籍は、1963(昭和38)年、渋沢家から東京都立日比谷図書館に寄贈され、現在は東京都立中央図書館に所蔵されています。

毎週土曜日12:30～15:45に公開をしています。

(公式サイトから転載)

豊かな自然の中で、渋沢栄一の足跡にふれてください。

ただけです。

本館2階が展示室です。常設展示室では、渋沢栄一の生涯と幅広い分野にわたるその業績に関する資料を、写真とともに展示しています。

企画展示室ではテーマを絞り、期間を決めて毎年1回、原則として秋に特別の展示を行っています。

展示室の一角には一息つけるリフレッシュ・コーナーがあり、そこには渋沢邸で使われていた書棚や椅子

	本館	晩香廬	青淵文庫
竣工時期	1997(平成9)年	1917(大正6)年	1925(大正14)年
所在地	東京都北区西ヶ原2-16-1	東京都北区西ヶ原2-16-1	東京都北区西ヶ原2-16-1
構造	鉄筋コンクリート造り、地上2階、地下1階建て	木造瓦葺き平屋建て	鉄筋コンクリート・煉瓦造、2階建て
延べ床面積	1,653.13㎡	約72㎡	約330㎡
設計	株式会社 佐藤総合計画	田辺淳吉	中村・田辺建築事務所
施工	清水建設株式会社	現在の清水建設株式会社	現在の清水建設株式会社

渋沢史料館

〒114-0024
東京都北区西ヶ原2-160-1
☎03-3910-0005
ホームページ
<http://www.shibusawa.or.jp/>



渋沢史料館は財団法人渋沢栄一記念財団が運営しています



渋沢家四代。左端が栄一

「時代のおーガナイザー」であったと感じますね。生涯に関与した企業は約500と言われています。もちろん積極的に経営に関与した企業もあれば、アドバイザー程度の企業もあったでしょう。しかし多岐にわたる分野の企業をオーガナイズしてきた人生であったことは、間違いありません。彼がそれだけの活動をできた理由はさまざまですが、大きな要因として「情報」があると思います。

渋沢という人は本当に好奇心旺盛で、先に触れた渡米実業団の時には、予定外の視察をしたために团长自ら列車に乗り遅れるというエピソードまで残っています。古希の、しかもハードスケジュールで疲れているはずの人が、常に

Info

宇都宮商工会議所では9月1日から10日まで、渋沢栄一史料展や、講演会、シンポジウム等を計画しています。詳しい内容については、次号(7月号)の天地人にてご案内します。



遺言書

渋沢の遺言書

前向きに情報を収集していただければ、常に情報を収集し、それを活用し続けながらこそ、人生の局面でさまざまな決断を下し、成功に導くことができただけではないでしょうか。これも、現代の経済人に渋沢がリスベクトされる大きな要素だと思います。



「経済だけでは足りない。強さの源は、渋沢の精神力です」と話す井上 誠

近代日本の実業家 渋沢栄一の魅力を探る

- 1906年(明治39年) 66歳 東京電力会社創立・取締役。京阪電気鉄道会社創立・創立委員長(後に相談役)。鉄道国有法公布。
- 1907年(明治40年) 67歳 帝国劇場会社創立・創立委員長(後に取締役会長)。(恐慌、株式暴落)
- 1908年(明治41年) 68歳 アメリカ太平洋沿岸実業家一行招待。
- 1909年(明治42年) 69歳 多くの企業・団体の役員を辞任。渡米実業団を組織し团长として渡米。タフト大統領と会見。
- 1910年(明治43年) 70歳 政府諮問機関の生産調査会創立・副会長。(日韓併合)
- 1911年(明治44年) 71歳 勲一等に叙し瑞宝章を授与される。
- 1912年(大正1年) 72歳 ニューヨーク日本協会協賛会創立・名誉委員長。第一協会成立。
- 1913年(大正2年) 73歳 日本結核予防協会創立・副会長。(後に会頭) 日本実業協会創立・会長。
- 1914年(大正3年) 74歳 日中経済界の提携のため中国訪問。(第一次世界大戦勃発)
- 1915年(大正4年) 75歳 パナマ運河開通博覧会のため渡米。ウィルソン大統領と会見。
- 1916年(大正5年) 76歳 第一銀行の頭取等を辞め実業界を引退。日米関係委員会が発足・常務委員。
- 1917年(大正6年) 77歳 日米協会創立・名誉副会長。事実上の金本位停止。
- 1918年(大正7年) 78歳 渋沢栄一著「徳川慶喜公伝」(竜門社)刊行。
- 1919年(大正8年) 79歳 協賛会創立・副会長。(ヴェルサイユ条約調印)
- 1920年(大正9年) 80歳 国際連盟協会創立・会長。子爵を授けられる。(株式暴落(戦後恐慌))
- 1921年(大正10年) 81歳 排日問題善後策を講ずるため渡米。ハーディング大統領と会見。
- 1923年(大正12年) 83歳 大震災善後会創立・副会長。(関東大震災)
- 1924年(大正13年) 84歳 日仏会館開館・理事長。東京女学館・館長。米国で排日移民法成立。
- 1926年(大正15年) 86歳 日本太平洋問題調査会創立・評議員会長。日本放送協会創立・顧問。
- 1927年(昭和2年) 87歳 日本国際児童親善会創立・会長。日米親善人形教迎会を主催。(金融恐慌勃発)
- 1928年(昭和3年) 88歳 日本航空輸送会社創立・創立委員長。日本女子高等商業学校発起人。
- 1929年(昭和4年) 89歳 中央盲人福祉協会創立・会長。(世界大恐慌はじまる)
- 1930年(昭和5年) 90歳 海外植民学校顧問。(金輸出解禁)
- 1931年(昭和6年) 91歳 11月11日永眠。(満州事変)